

現地でしか得られないもの

海星学院高等学校 Sora K.

「多くの人の心に支援の火を灯す」

これが私の目標としていることです。

この目標を実現するために今回のカンボジアスタディツアーに参加させていただきました。ですが、私が思っている以上に様々なことを現地で得ることができましたので、文字を通してとなりますが、これからお伝えしていこうと思います。みなさんにとっても有益な情報になると思いますので、ぜひ最後まで目を通していただけると幸いです。

○はじめに

私には将来の夢があります。それは、貧困により生活することが困難な人のために食を届けるということです。そのためにはまず私自身が世界の現状を自分の目で確認し、現地の人々が何を求めているのかを知る必要があると感じました。私はインターネットで調べただけの本当なのか嘘なのかわからない情報を鵜呑みにして行動することに抵抗があります。そのため、現地の人々の生の声や生の情報を得たいと強く思いました。今回のスタディツアーに参加して得ることのできた情報を活かし、これからも活動していきたいと思っています。

教育について

カンボジアの現在の教育制度

国民全員が教育を受けられ、日本と同様6-3-3制（初等教育6年間、中等教育3年間、高等教育3年間）が採用されています。一方で、義務教育は初等教育のみとなっています。カンボジアの教育課題としては、留年・退学率の削減や修了率の改善、教員不足の改善などが挙げられます。

現在は特に教員不足を改善すべく、教員を育成する大学を設立し、講義や実習を行っています。

○寺子屋

リエンダイ寺子屋 (Leang Dai LLC)

「アンコール寺子屋プロジェクト」10件目の寺子屋



今回は小学校（復学支援）クラス、中学校クラス、大人向けの識字クラスにお邪魔させていただきました。左の写真は小学校クラスの授業中の様子になります。日本の学校とは違い、長机を3人一組で使用しています。このクラスでは、小学校課程を2年間で修了できるよう特別に編成されており、子どもたちがまた公立の中学校に通うことができるよう工夫されて支援が行われています。

識字クラスは25人定員の2クラスが開講されており、リエンダイ寺子屋に通う生徒数は「アンコール寺子屋プロジェクト」で設立された全22軒の寺子屋の中で2番目に多くなっています。

★小学生クラス、中学生クラスとそれぞれに質問をさせていただきました。

Q.将来の夢はなんですか？

A.先生、軍隊、車の修理、警察

日本で人気の将来の夢として挙げられる医者やパティシエなどは全く出てこず、彼らに身近な存在の大人の職業を挙げられたことが印象的でした。

Q.好きなことはなんですか？

A.本を読む、友達と遊ぶ、スポーツをする、食べる、ゲームをする等

日本の小学生や中学生の子どもたちと好きなことはあまり変わらず、すごく楽しそうに毎日を過ごしているように感じられました。

Q.寺子屋に欲しいもの、足りないと思っているものはありますか？

A.図書館、運動場、ギター、扇風機等

勉強が好きな子や本を読むことが好きな子がたくさんおり、そのような子たちは図書館に本をもっと増やしてほしいと言っていました。また、男子生徒の多くが運動することが好きなのですが、現在はスポーツできる場所がないため運動場を作してほしいとのことでした。やはり、日本の小学校、中学校のようにグラウンドのような場所が幼い彼らには必要不可欠なのではないかととても感じました。



左：寺子屋の子どもたちとの交流



右：中学生クラスでの質疑応答

○自宅訪問



実際にリエンダイ寺子屋に通われている女子生徒の家にお邪魔させていただきました。

左の写真は竹を染色してラグを作っている様子です。写真に写っている色以外にも他4種類あり、1枚18ドルで売れます。売るためには担いで街まで行く必要があり、そこで得た18ドルのお金を一週間少しずつ切り崩しながら生活しています。家の造りは高床式になっていて、奇数の階段が特徴的です。扇風機は1台しかなく、乾季の時期は暑くて眠れない時期が続いてしまうようです。

女子生徒の母親は、「借金があつて困っていることもあるけど、今の生活も幸せです。」とおっしゃっていました。その時、私は勘違いをしていることに気が付きました。現地の子供達や家族が実際に生活しているところを見て、私達が勝手にかわいそうと決めつけていた部分があったということです。私達は普段お腹いっぱいにご飯が食べられて、毎日当たり前のように学校に通え、好きなものを買いたい時に買えることが幸せだと思っている人がほとんどでしょう。それを勝手に他の国や地域の人に当てはめて考えていたのです。人によって幸せは違います。一概に「幸せではない」と思うのは違うと気付かされました。

現在寺子屋では、**栄養支援（給食）プログラム**というものを行っております。実際に子どもたちを見たらすぐに分かるのですが、カンボジアの子どもたちは圧倒的に栄養が不足しています。私と同年の子と並んでも、背が小さく発達が遅れていました。そのような子たちのためにも多くの子供に十分な栄養を届けられるよう行動していきたいと改めて感じました。

歴史について

どの国にも暗い歴史があるように、カンボジアにもとても暗い過去があります。

クメール・ルージュ政権 1975年－1979年

極端な農本主義的政策を取り、カンボジアの急進的な社会改革を目指したもの。知識層を中心に約200万人のカンボジア人が虐殺、拷問、飢餓などで命を落としました。人々は「オンカー」（党）の所有物であり、クメール・ルージュの監視のもと共同生活を送っていました。それは奴隷のような生活であり、裁判機能は停止しあらゆる理由で罰せられ、拷問にかけられて殺害されました。

トゥールスレン虐殺博物館は実際に12,000～20,000人の人々が収容されていた場所です。確認された生存者はわずか12名で、多くの人々が虐殺されてしまいました。トゥールスレンの収容者はチュンエク村の「キリング・フィールド」に連行され、処刑されました。



トゥールスレン虐殺博物館



キリング・フィールド

トゥールスレン虐殺博物館では音声ガイドを使用して見学しました。音声ガイドがあることにより、ポル・ポト時代の悲惨な出来事を写真とともに深く知ることができました。人々が収容されていた建物の中には当時の写真があり、今では考えられない衝撃的な写真ばかりが並んでいます。私は、カンボジアに行く前からトゥールスレン虐殺博物館の存在を知っていましたが、実際に入館してみると重々しい空気が漂っており、言葉では表せないような独特な雰囲気がありました。また、キリング・フィールドではその場で発掘された人骨や虐殺が行われた現場を見ましたが、「ここで虐殺された方々がいる」という信じられない事実を痛感させられました。

○最後に

私が今回のカンボジアスタディツアーで学んだことは上記に書いたものが全てではありません。他にもカンボジアの現在の政治や世界無形文化遺産の「アプサラダンス」、世界文化遺産の「アンコール・ワット」など、私が学びたいと思っている教育以外の分野についても勉強させていただきました。カンボジアに行かせていただけなかったら、出会えていなかったことが多くあったと思います。インターネットのみでその国について知ろうとすると、どうしても自分が興味のある分野に偏ってしまい、すべてを満遍なく知ることは難しいです。また、実際の現地に行くことにより、“新しい視点”で“新しいことに興味を湧く”きっかけにもなります。しかし、**情報は^{なまもの}生物**です。一度得ることのできた情報がずっとこの先も正しいということはありません。果物が時間の経過とともに腐敗してしまうのと同じように、情報も常に更新し続けるため、昔の情報は腐敗してしまいます。なので、一度得た情報だけを信じて行動するのではなく、これからもより多くの情報を得られるよう活動していきたいと思っています。このような機会をいただけたことに感謝するとともに、今回の経験をこれからの活動に活かして私自身もアップデートしていけるよう頑張っていきます。

最後まで目を通していただき、ありがとうございました。